

転生した元女騎士ですが、
護衛対象の美形皇子に迫られています

プロローグ

騎士にとって主君を守って死ぬことは誇りである。

だが、たとえ誇りであったとしても、死なずにもっとお仕えしたかったという本音がないわけではない。だからといって蘇って再び……なんて、叶いもしない願いだろう。

でも、もしできるのなら……

『忠実な騎士として、もう一度主君の傍でお仕えしたい』

こんなありえもしない願いが叶ったのなら、幸せだと思ったただけなのに――

――ダンッ！

手首を強くつかまれて、ソファに押し倒されると、頭上で月白色の髪が揺れる。

「……で、殿下。私はしがない使用人ですよ？」

美しく揺れる髪の間から覗いていたのは、長いまつ毛と瑠璃色の瞳。部屋窓から差し込む月の光で反射し輝きを放っている。それは私の記憶にある、何粒も涙を流して潤うるんでいた丸い瞳と同じ色をしていた。

けれどもいま私の目の前にあるのは、綺麗な切れ長の大人の目だ。
「使用人？」

大きな手ですっぽりと両手首をまとめ上げられると、思いのほか力が強くて抜け出せない。
(つく、こうなったら足で……)

まだ動きのとれる足を蹴り上げようとするが……

「ただの使用人が、足を引つ掛けて体勢を変えようとする？」

「っう!!」

すぐに空いている片手で足をつかまれて、さらに押さえつけられてしまった。無表情で見下ろされる、その冷たい瞳に額から汗が流れてくる。もはや逃げ道なし。

「いつまでも俺を子供扱いしないで。いまは君より年上。この意味は分かっているよね？」

「なんのことだか……分かりません」

ふいつと顔を横に背けたが、すぐに頬をつかまれて正面を向かせられる。私の上で薄らと笑みを浮かべる彼は美しく、けれど憂いを帯びていて、あまりの妖艶さにごくりと喉が鳴った。

「……ああ、たしか君は、年の差の許容範囲は六つまで？ だったかな」

「っ!？」

「いまは、そうだな……いち、に、さん……」

にやりと笑い、目の前の男性がゆっくりと自身の長い指を折っていく。

(まずい。これは大いにまずいことになった)

「し、ご、ろく……うん。許容範囲内に入ってる」

「それは……っあ!？」

最後に折り曲げた小指だけを伸ばして、私の下腹部に触れた。指先から熱がじんわりと広がっていく。
「問題は解決したよね」

思わず頬がかつと赤くなつた。彼はそんな私を楽しそうに見下ろして意地悪に笑いかけてくる。

(主君を守ることができたなら、幸せだと思つたのに……)

記憶の中の彼は純粹で可愛らしくて、『守りたい』という忠誠心を掻き立てるような愛らしさがあつた。それなのに……

「ああ、嬉しいなあ。いまはすっぽりと俺の腕の中におさまるんだから」

怒りなのか、悲しみなのか——それとも憎しみなのか。

いま目の前にある瞳は何を考えているのか分からない。笑っているけれど、その真意は読み取れない。とりあえず浮かぶのは、『どうしてこうなつた?』という単純な疑問だけ。

「俺の十八年の苦しみを、これからじっくりと教えてあげる」

そう耳元で囁かれたあと、瑠璃色の瞳が誘うように甘く美しく煌めいた。

「顔を上げて」

広い部屋の中で、片膝をつき頭を下げてしていると聞こえてきた幼い声。その声につられて私は顔を上げた。

（おやまあ……）

私の視線の先、赤いカーペットが敷かれた壇上に立つ小さな男児の姿に息を呑む。真ん丸とした瑠璃色の目に白い肌、すつと伸びた鼻筋。まだ齡六歳というのにすでに完成され、将来が大いに期待できる美貌だった。

「君がアメリカ？」

見惚れていたところに声が聞こえて、慌てて意識を戻す。すぐに左胸に手を当てて口を開いた。

「はっ！ 本日づけでクレイセント殿下の護衛騎士に任命されました、アメリカ・ラルディーニです。よろしく願います！」

「うん、よろしく」

ふわりと微笑んだ彼の顔は目眩がしそうなくらい美しい。けれど……

（貼りつけられたような笑顔ね）

まるで教科書のお手本みたいな百点満点の笑顔のはずなのに、違和感を覚える。

そんな彼を見つめていると、丸い瑠璃色の瞳がじっと私を映していることに気がつく。どうやら私の頭上で一つにまとめられた山吹色の長い髪を見ているようだ。

「君は女性？」

（やっぱり最初の疑問はそうくるわよね）

女性の平均よりも高い身長に、鍛えられた筋肉質な身体。その上、男性とまったく同じ騎士服を着ていることから、性別の判別がしにくいのだろう。私自身も、そう思われるのも仕方ないと理解している。慣れた質問に笑みを浮かべて答える。

「はい。ですが聖剣を得ておりますゆえ、ご安心を。必ずや殿下をお守りいたします」

「そう……」

男児が自身の右手につけられた手袋に触れる。すると近くにいた従者たちが、身体をびくりと揺らして顔を顰めた。彼はそんな者たちを横目で見てから俯いて、唇を薄く開く。

「はじかれもの同士、ということか」

小さな声量で発せられたために、周りには聞こえていないようだった。おそらくそれを見越しての呟きだろうが、あいにく私は昔から耳がいいので聞こえてしまった。

（はじかれもの同士……）

聞こえてしまった手前、なんと反応すれば良いのか考える。だが、すぐに男児は先ほどと同じ笑みを浮かべた。

「じゃあ明日からよろしく」

そのまま大広間に隣接する皇族専用通路の扉から出ていってしまう。姿が見えなくなると、その場にいた従者たちがほっと安心するように息を吐いた。

(あー、なるほど、なるほど)

このような状況なら、心の壁が分厚くなってしまふのは無理もないかもしれない。ふうーと私も長い息を吐く。だが、これは従者たちとは違う意味合いのものであった。

——絶対に信頼してもらわなければ!

という意気込みのもの。分厚い壁のほうが壊したときの喜びはひとしおだろう。

申し訳ないが、こんなことでへこたれるようでは『女騎士』など務まらないのだ。鼻の穴を大きくして、ふふんと鼻息を漏らしながら私も部屋をあとにした。

◇ ◇ ◇

「おい、アメル! どうとう、皇子殿下の護衛騎士に任命されたらしいな!」

翌日、屋敷の裏庭で剣を振っていると、ドカドカという野蛮な足音が聞こえてきた。その直後、太い腕に肩を組まれ、荒々しく頭を撫でられる。

「アルフェント兄様。そうやって頭を撫でる癖は直してくださいませんか」

顔を上げてから太い腕を手で弾く。振り向くと、ガタイのいい山吹色の短髪男が、豪快に口を開

けて笑っていた。

「なぜだ? 可愛い妹の昇進を、全身を使って喜んでやるのは当たり前だろう」

(はあ、こんのガサツな男め。喉の奥にバナナを房ごと突っ込んでやろうかしら)

脳内で罵るが、恥ずかしながらこの男は私の実兄である。

「いやあ、アメルも三十手前にしてやっとお役目をもらえとはな! 女を捨てて、必死に鍛錬を積んできたおかげだな!」

ぐっと親指を立ててウィンクしてきた。やはり脳天に剣を振り下ろしてやりたい。剣をつかむ力がギリギリと強まる。

(まあ、その通りと言えはその通りなんだけど)

持っていた剣を青々とした葉が生い茂る木に立て掛ける。空を見上げれば、屋敷の屋根で白と黒を基調とした国旗が揺れていた。

ここは長い歴史を持つ大帝国ロメルシエ。その帝国で私、アメリカ・ラルデーニは侯爵家の一人娘として生まれた。ラルデーニ侯爵家は、古くから皇家の護衛騎士として仕えてきた歴史を持つ。そんな環境ですつと剣に触れていたせいか、私の目指すものが決まるのは早かった。

——『父様、私も騎士になれますか?』

幼い頃に瞳を爛々と輝かせながら、皇帝陛下の護衛騎士を務めていた父様にそう問いかけたが、笑って言葉を濁されただけだった。

その理由は、幼い頃の私には分からなかった。けれど成長していくにつれて、男女の身体の造り

や力の強さの違いなどに触れ、父様が言葉を濁した理由も必然的に分かるようになったのだ。

周囲の人たちは、女が騎士を務められるわけがないとばかりにしてきた。

(必ずや騎士として立派に務めてみせる)

周りからの非難や蔑み(さげす)みを逆にばねにして必死に鍛錬していると、二十五歳になる頃に、私の目の前に眩しい光を放つ剣が現れた。それは聖剣と呼ばれる剣で、優秀な騎士にのみ現れるという貴重なものだった。だが謎が多く、その出処も不明だ。分かることといえば、生涯を共にし、主が死ぬば聖剣も静かに消えてなくなるということのみ。

聖剣を得た私は、騎士として最高峰とされる『剣聖』の称号を与えられた。現在、剣聖の称号はこの帝国では父様、兄様と私しか得ていない。

そうしてようやく周りから認められた私は、騎士宿舎を闊歩すれば道を勝手に開けられて、ほかの男性騎士から称えられるようになった。

『うわっ！ 軍神のアメリカ様だ！』

『この間の戦も一人でおさめたらしいぞ！ 男より男らしいぜ！ 痺れるなあ』

男扱いされても悲しくはない。実際、父様と兄様以外で私に敵う男はいなくなつた。二十代後半になるのに、これまで縁談の一つもなかったことだつて仕方ないのだ。うん、悲しくない。

そうやって必死に自分を納得させて過ごしていた最中、齡二十九にしてやっと皇子殿下の護衛騎士という役割をいただいた。そして、殿下との初めての顔合わせが昨日のあれだ。

「まっ、お役目といつてもあの黒皇子の側近だけだなあ」

「その言い方はおやめください。私の主君への侮辱とみなし、いますぐに制裁いたします」

「うわあ!? 剣を抜くなよ、ばかにしてるわけじゃないって!」

腰に携えた聖剣を抜く振りをすると、アルフェント兄様はわざとらしく木の陰に隠れる。ふんつと鼻息を漏らし私は剣から手を離した。

私が護衛騎士として仕えることになつたのは、皇子であるクレイセント殿下。まだ六歳になつたくらいの幼い男児だ。皇帝陛下の実子はクレイセント殿下のみ。そのため、ゆくゆくは皇帝になる立場にあるはずなのだが……

(『はじかれもの同士』……あの歳ですでに帝国内の力関係を理解しているなんて優秀ね)

ふむと顎に手を当てる。『剣聖』の称号を得た騎士と言つても、大前提として私の性別は女だ。そもそも女騎士自体、初めての存在なのだ。そのために帝国内の貴族たちからの信頼は薄く、陛下の側仕えにするのは難しい。かといって『剣聖』を無下にすることもできない。

「おそらく殿下は、女で騎士である私を寄越した意図を分かかっていらつしやるのでしょうか」

「あー……どう扱つていいか分からんもの同士でくつつけさせとけつてことか。たしかに、『黒』と同じくらい珍しいもんなあ、女騎士は」

楽しそうにそう答える兄様に呆れつつも、改めて殿下との初対面を思い出す。彼は柔らかな微笑みを浮かべていたにもかかわらず、周りの者たちは怯えていた。

(本当であれば、引く手数多の皇子殿下であらうに)

我が国には皇族のみに伝わる力——『白』の力が存在する。魔法と呼ばれるものに近いのだろう。

傷を癒し、力を強める力で、聖者の治癒能力の特化版のようなものだ。

だが稀に、『白』以外の力を持つ皇族も生まれるという。それが『白』と相反する『黒』だ。『黒』の力は攻撃に特化してありとあらゆる呪術を使うことができるが、他者を操り、苦しめるような力が強い。いわば、簡単に人を呪い殺めることができるのだ。

力を持つ皇族の右手の甲には、それぞれの色を表す模様が入っている。皇族はそれを誇りとしているため、公の場で手袋をはめることはめつたにしない。けれどクレイセント殿下の右手には、『黒』の模様を隠すかのように、きっちり手袋がはめられていた。

色白で、線が細いクレイセント殿下の美しい容姿を思い出す。あのような容姿と『黒』は結びつきにくいが……

「あそこまで従者たちが露骨に態度に出しては、殿下が不憫です」

「まあな。ずっと『白』が生まれていたから、久々の『黒』の誕生に恐れる気持ちも分からんでもないが。それに、以前力の爆発を起こしたくらいだ。殿下はあまりに力が強すぎる」

数年前、皇宮内で死者が出るほどの騒ぎがあった。幼いクレイセント殿下が力をコントロールできず、周りを巻き込むほどの力の暴発を起こしたことが原因だ。兄様が言うように、彼に受け継がれた『黒』の力は強すぎたのだ。

「もともと『黒』は力が強い傾向にあるらしい。だからコントロールも難しい。そのせいで、皇帝の座につくお方は少ないと、文献に書かれているほどだしな」

「若く優秀であろうと、『黒』を受け継いだ時点で将来性はほぼないと」

「力の扱いようだと思っけどな。過去に、『黒』の皇帝がいたこともある。まあでも、貴族たちがクレイセント殿下を見下しているのは事実だ」

確かに『白』の皇族派との間に、皇位継承争いが生じているという噂も聞く。

「殿下はそれを分かっているようです。誰にも心を許していない、といった感じでした」

「かわいそうになあ。見るからに優秀そうなんだが。まっ、何度も足繁く通っていたら、なんとかなるだろ！」

そう言うのと、兄様はパンパンと背中を強く叩いてきた。

「『黒』だろうと『白』だろうと、私の主君となられた時点で、生涯お仕えするには変わりありません。主君をばかにした者は排除するだけです」

「我が妹ながら怖いねえ。まあ、そのくらいでへたつてたら、ラルディーニ侯爵家の名折れだしな」

鋭い視線を向けた私に兄様はにんまりと笑い、頭を軽く撫でて立ち去った。

「まずは心を開いていただくことが優先か」

ふうと息を吐いてから、私はまた意気込んで聖剣を振った。

それから、殿下のもとへ足繁く通う日々が始まった。

「殿下、外へ行きませんか？」

勢い良く部屋の扉を開いて提案すれば、殿下が顔を上げた。にこにこ笑っている私に怪訝そう

な目を向けている。

「いきなりすぎない？ それにアメリカ、僕はあんまり出歩くのは好きじゃない」

「何をおっしゃいますか、殿下。子供は外で遊ぶのが仕事ですよ」

「……仕事」

複雑そうに表情を歪ませて俯いた。

(んー。自分の力をコントロールできなくなるのが、不安なのかもしれないわ)

「殿下、私は必死に鍛錬を積んできました。そんじょそこの騎士たちと一緒にされては困ります」

ゆっくりと殿下の前でひざまずいて左胸に手を当てる。強く見つめると彼の丸い目が少しだけ開かれたが、すぐに苦しそうに視線を逸らされてしまう。手袋をはめた右手を隠すように、左手で皺が寄るほど強くつかんでいる。

「でもっ、僕は……」

「むしろ、殿下の『黒』と戦ってみたい気もしますしね！」

『黒』の力を見たことはないが、どれくらい強いのか。もっと気を許してもらえたら手合わせしてもらえるかもしれない。想像すると楽しみで興奮してくる。

ふんふんと鼻息を荒くして、目を輝かせている私とは反対に、殿下は目を真ん丸にさせ、口を開いていた。

「殿下？」

「本気で言ってる？」

「本気じゃなかったら言いませんよ。私はいつだって本気ですが」

また鼻息を鳴らせば、殿下はさらに口を大きく開けた。だが、すぐに口を閉じて横を向いてしまった。何か気にさわったのだろうかと首を傾げながら様子を窺う。

「あの一、殿下？」

ちらりとこちらを見たあとに、閉じられていた口が再び開かれる。

「……アメリカって、脳筋」

「はい!?」

(なんでいきなり脳筋扱い!?)

「私は違いますよ!? 兄様はそうですが!」

たしかに周りの騎士たちからは脳筋兄妹と揶揄されることはあったが。

「ふふっ、鼻息荒い時点で、アルフェントに似てるよ」

「っ!!」

いつの間にか殿下は笑っている。それはいつもの笑顔とはどこが違う。これは貼りつけた笑いではなく、自然と溢れた笑みという感じだ。

(んぐぐ、美形は羨ましいわ)

寂しい独身兄妹に、少しはその美貌を分けてほしい。兄様と同類扱いされたことは悲しいが、殿下が私に心を開いてきた傾向だと思うと嬉しくてたまらない。

「それでアメリカ、どこへ行くの？」

「はい。城下町にある私の馴染みの店へ行きませんか？」

「僕を城の外へ勝手に連れて出かけたと、お父様に叱られても知らないからね」

「そこはご安心を。陛下からも了承をいただいています。それと変装グッズも用意しました！」

「変装？」

「はい。殿下の顔は目立ちますからね。お忍び親子スタイルです！」

部屋を出て皇宮の廊下を歩きながら、持っていた袋から分厚い眼鏡と平民の服を取り出した。殿下がまじまじと変装グッズを見つめている。

（兄様が聞いたら、『ド平凡顔のお前と美麗殿下が親子!』ってゲラゲラ笑われそうだけど……）

「アメリカと親子……」

やはり殿下もそこが気になるのか、眉を顰^{ひそ}めている。なんだか私も少しだけ恥ずかしくなってきた。

「が、我慢してくださいっ！ たしかに殿下とは似ても似つかないですけど」

「いや、そういうことじゃ……」

「これはこれは、クレイセント殿下ではございませんか」

赤くなりながらも殿下に変装グッズを渡そうとしたとき、廊下の先にいた何人かの年配貴族たちがこちらに近づいてくる。殿下の表情がまたいつもの貼りつけた笑顔に戻ってしまった。

「どちらかへお出かけですか？」

彼らは私が手に持っていた眼鏡や変装グッズを横目に見て、怪訝そうに顎髭^{あごひげ}を撫でている。殿下が笑顔で答えようとすると、それより先に私がすっと前に出た。

「城下町を案内させていただきたいと、私がクレイセント殿下に申し上げただけです。何か問題でもございましたか？」

「殿下を城下町へ……」

貴族たちが目を合わせたあと、どつと笑いが起きる。

「皇子殿下にそんな安っぽい格好をさせて、城下町にお連れするなんて」

「やはり女騎士は感覚が幼稚なのです。まったく、お遊びで護衛騎士をされては困りますね」

（こいつら……）

好き勝手言い始めた貴族たちを前に、私の身体が怒りで震え始めた。本当ならば即刻叩き伏せてやりたいところだが、仮にも相手は貴族。殿下のお立場を考えると、迷惑はかけられないと必死に我慢する。

「クレイセント殿下に気を遣わせない程度にしてほしいものです」

「はははー、ご忠告ありがとうございますー。では、失礼いたしますー！」

（二度と話しかけてくるな！）

表情筋を引き攣らせながら笑顔で流し、すれ違う貴族たちに脳内で暴言を吐いていると……

「おい、また力を暴発させたらどうする気だ？」

去り際に囁かれた言葉に、はっと顔を上げて振り返れば、貴族たちがにやりと笑っている。殿下

にも聞こえたはずだが、表情を変えず笑顔のままだった。

「アメリカ、部屋へ戻ろう」

「な、殿下っ……」

何事もないように部屋へ向かおうとする。貴族たちがそんな様子をクスクスと笑いながら眺めている。

(なぜっ……)

「自らの立場を分かっているのなら、早く決断すれば良いものを」

——プチーン！

追い討ちのような言葉が聞こえた瞬間、私の頭の中で何かが切れた。罵った奴の喉元に手刀をかますと、瞬時に足を身体に引っ掛けて床に叩きつけた。その時間、コンマ数秒。

「つぐあ……や、やめ……」

「貴様。我が主君をばかにしたわね」

男の片腕をギリギリと持ち上げながら、背中を足で踏みつける。周りの貴族たちが、あまりの早業に目を見開いて固まっている。

「な、何をしている！ アメリカ・ラルディーニ……ぐあ!？」

私につかみかかろうとする男の首を、空いた手でつかみ上げた。

「忘れていたようにだけれど、私は『劍聖』よ。命が惜しければ口を慎みなさい」

そのまま身体を持ち上げて床に叩きつける。叫び声を上げて逃げ惑うほかの貴族たちも首根っこ

をつかまえ、次々と倒していく。

「一度だけ忠告しておいてあげる。次にクレイセント殿下を罵るような発言をしたら、『劍聖』である私が許さない」

抜いた聖剣を床に突き刺して言い放ったが、辺りはしーんと静まり返っていた。

(——ん?)

「アメリカ……もう意識がない」

「はっ！」

殿下の声で我に返る。周りを見渡せば、目の前で貴族たちが意識を失い、転がっていた。廊下の片隅でメイドたちまで震え上がっている。

(しまった……!)

「や、やってしまいました、よね?」

「うーん。お父様には怒られると思う、けど」

「あー!!」

頭を抱えつつ、目の前に倒れ込む貴族たちの頭をつかんで持ち上げる。ペチペチと手で両頬を叩いてみるが反応はない。すでに屍のようだ。横たわる彼らを前に、あわあわとしてしていると……

「……ぷっ、あはは!」

(へ?)

突然大笑いし出した殿下に驚いて、そのまま固まってしまふ。

「ふふっ、あんな奴らの言葉なんて無視すればいいのに。ばかだなあ」

「いやいや、無視はできませんよ!? 主君をばかにされて黙っていることなんてできません!」

キーツと怒って反論する私とは真逆に、殿下はきよとんとしている。

「殿下ももつと怒りましょうよ! ふざけるなーとか、処刑だーとか!」

「処刑は無理だよ。でもそうだね。なんだか怒ることも疲れてたから」

殿下はそつと右手の手袋に触れて俯く。けれど、すぐに顔を上げると優しい笑みを浮かべていた。

「ありがとう、アメリカ」

「殿下……」

「謹慎だけで済むようにお父様に頼んであげる」

「ほんとですか!? ありがとうございます!」

泣きながら喜ぶ私に、殿下はくすぐすと笑いながら手を差し出す。今度は私がきよとんと固まっ
てしまった。

「城下、行くんでしよう。今日だけアメリカと親子になつてあげる」

「ッ!!」

殿下の瑠璃色の瞳は、窓から差し込む日差しでキラキラと輝き宝石のようだ。あまりの美しさに
拜んでいると、「早くしないと置いていくよ」と呆れられたので、慌てて手を繋いだ。

そうやって殿下との距離は日に日に縮まっていった。ありがたいことに、殿下自身から外に出た

いと言ってもらえることも増えていった。

「アメル、今日は二人でお出かけしようか?」

部屋で本を読んでいた殿下が、顔を上げて笑顔で誘ってくれる。

「はっ! もちろん!」

(ふあゝ。愛称で呼んでいただけなんて、ありがたき幸せ)

ぎゅつと殿下から抱きしめられて、下から笑いかけられる。天使か。これは天使なのか。

彼は前よりも年相応の子供らしい自然な笑顔を見せることが増えた。それに距離も近づいた気が
する。とても嬉しい。嬉しいのだけれど——なんだか最近は違和感があるのだ。

「ありがとう、アメル」

そう言った殿下の白い肌はほんのりと朱色に染まり、潤む瞳で私を熱っぽく捉えていた。なんだ
か殿下の身体からピンク色の矢が出て、それが私に突き刺さっている幻覚が見えてくる。

(ん? んんん? んんんん——?)

そう、殿下から向けられる感情が以前と少し変わっている気がするのだ。

あまりにモチなすぎて私は幻覚を見始めたのだろうか。いや、勘違いに決まっている。額に手を
当てて苦笑しつつ、皇族のみが入れる草原へと殿下と二人で向かった。

「アメル、僕と結婚して」

草原に着いて大きな木の下で膝をつきながら、いそいそとピクニックの準備を始めたとき頭上か
らそんな言葉が聞こえた。意味が分からず、うずくまったまま身体が硬直した。おそるおそる見上

げると、殿下がじーっと私を見下ろしていた。

(うん、きつと聞き間違いよ。幻聴まで聞こえるようになったかしら。はあ、困ったものだわ)

彼から視線を逸らし、何事もなかったかのように鞆を開いてサンドウィッチを取り出した。

「殿下。昼食用にサンドウィッチを持ってきましたが、召し上がりますか？」

「僕と結婚して」

鞆から取り出した水筒とサンドウィッチを両手に持ったまま首を傾げる。

「ケッコ……ケッコ、ケッコン？」

「ん。結婚」

(結婚……!?)

ここまでくると聞き間違えではない。殿下は確実に『結婚』と言っている。

渋々顔を上げると、殿下が真上からそれはまあ美しいお顔で微笑んでいた。思わず見惚れてしま
いそうになるのを、こほんとかき払いして抑えて表情を戻す。

「殿下、私は殿下の護衛騎士です。それ以上にも、それ以下にもなれません」

笑顔できつぱりとお断りすると、小さな頬が大きく膨らんでいく。んふふ、可愛い。

「騎士じゃなくなったらいいってこと？」

「……えーと。それは、そうですが……」

「じゃあアメルがそうになったら結婚しよう？ だめ？」

(いやいや、だめに決まってるでしょうよ)

諦めずにぐいぐいと迫ってくる殿下にどうしたものかと考えながら、木陰にてきばぎと敷物の準備をしていく。

「まず殿下と私は歳がかなり離れています。お世継ぎ問題もありますし、何より私にとって殿下は
そういった対象ではございません」

「じゃあ誰が対象になるの？」

「そうですね、私の対象……結婚相手の許容範囲は……」

殿下の前で手を開いてから、につこりと笑う。

「歳は離れても、上下六つまでです」

殿下が大きく口を開け、いまにもガンンと言いきそうな表情に変わった。小さな指を折ってたどたどしく「いち、に、さん……」と数えている。

「二十三歳差です。殿下」

「二十三……」

「ああ、残念です。殿下とは二十三も違う。つまりは私の許容範囲を四倍も超えているのです。と
いうことで。同じ年頃のお淑やかなご令嬢とご結婚してくださいませ！」

きつぱりと言いきれば、目の前にいる殿下が口をパクパクとさせた。

(よし。ここまで芽を摘んでおけば大丈夫でしょう)

かわいそうだけれど、変に期待させてもいいけない。私は誰とも結婚するつもりはない。生涯、騎士として殿下に仕えるつもりだ。

「アメルなんか嫌い……」

「ははは、私は殿下が好きですよ。ああ、それは主君としてですが」

「……そういうデリカシーのないところが嫌い」

私が寝転がって空を眺めると、殿下はむっとしつつも隣に並ぶ。なんやかんや言いつつ、丸め込まれるところが子供らしく可愛らしい。瑠璃色の瞳をうるうるすると潤ませている。

「殿下の瞳は瑠璃石りほうせきと似ていますね」

「瑠璃石？」

「はい。湖の中の石が結晶化したものらしいですよ。殿下の瞳と同じ色をしているとか。昔、父に教えてもらいまして、幼いながらにその石をねだった記憶があります」

「へえ、そんな石があるんだ」

「帝都の北にある森の湖に沈んでいると言われていますが、なんせ幻の石なので本当かは定かではありません」

「アメルはそれが欲しいの？」

「うーん、欲しいといえば欲しいですが、幻なので諦めていますよ。だから瑠璃石と同じ色の殿下の瞳を見られるのが、とても幸せなのです」

殿下の尖っていた唇が若干だが戻ってきている気がする。身体ごと殿下のほうを向いてにつこりと笑いかけると、彼は複雑そうに表情を歪ゆがめて私から顔を背けてしまった。けれどほんのりと耳が赤く、感情を隠しきれないのが分かる。

（少し機嫌が直ったかしら？）

また笑ってしまった私を見て殿下は眉間に皺を寄せたあと、空に向かって手を伸ばした。彼が右手にはめられた手袋をゆつくりと外すと、下から黒の模様が刻まれた小さな手が現れる。

「汚い？」

「いいえ。白い肌に紋様が映えていて、美しいなあと思います」

白の紋様は見たことがあるが、黒の紋様は初めてだ。黒ははつきりとしていて模様の細部まで分かりやすい。手に刻まれた葉の蔦たのような模様が美しい。

そっと小さな手に触れると、びくりと震えて離されてしまった。それに、殿下の眉間にさらに皺が寄っている。

「そういうところも……嫌い」

またもや顔を背けられてしまった。この紋様は殿下が『黒』の力を持って生まれたことを表す一番の特徴だ。それを軽々しく『美しい』などと言って触れたせいで、気を悪くしてしまったのだろうか。やはり心のままに発言したり、行動したりするのが良くないのだろうか。もっと気をつけなければ。気を引き締めていると、殿下の手が微かに震えているのが目に入った。

「……僕はずっと消えてなくなりたいって思ってた。この汚い手ごと」

殿下はそう言うのと、力なく笑って空を眺める。これまで殿下が周囲から向けられた悪意や蔑みを感じれば、彼の孤独は痛いくらいに理解できた。

「死んではだめです。殿下」

起き上がって真正面から見つめると、殿下は少しだけ目を開いた。だが、すぐにバツが悪そうに視線を泳がせる。

「私が一生傍におりますから、ご安心ください」

ゆっくりと起き上がると、殿下の前で片膝をつき、左胸に手を当てて深く頭を下げる。

「アメル。それって……」

「騎士として生涯を殿下に捧げると誓います」

改めて誓うと、妙に彼が静かなことに気がつく。はて？ と顔を上げると、彼が口を真一文字にして怒りのオーラを放っていた。なんだろう。

「アメルってほんとに空気を讀むってことを知らないよね」

「あつ、で、殿下！ なぜ怒って……って、待ってください。一人で行動しては危険です!!」

「知らない！」

頬をこれでもかと膨らませて走って逃げていく殿下を追いかける。最近の殿下の行動や思考は読みづらくて困る。

(まあ、前よりも子供らしくなったのは良いことなのかしら)

笑いながら追いかけると、殿下はさらにへそを曲げたようで、つかまえるのに時間がかかった。

数日後、いつも通り殿下の部屋で警護をしていたとき。殿下がばらばらと本を捲りながら、私に視線を向けて、部屋に隣接するお手洗いの扉を指さした。

「アメル、お手洗いにいきたい」

「はっ！ では私は外でお守りしております」

殿下が読んでいた本をテーブルに置いて、お手洗いの中へ入っていく。テーブルの上にはたくさんの本が積まれていた。どれも大人の私でも理解が難しい内容のものばかりだ。

「やっぱり皇帝になる器だわ」

殿下の優秀さを考えてみても間違いない。私が殿下の側近となって半年ほど経つが、力の強さの反動で体調を崩すことはあれど、それを暴発させずに自己の体内で管理している。

普通であれば、あのくらいの年齢では『黒』の力を抑えきれず、自死を選ぶことだってある。そんな力を上手くコントロールできているということは、彼がいかに優秀であるかを表している。

(ゆくゆくは皇帝か。見届ける日が楽しみだわ)

「……ん？」

しばらく感慨に浸っていたが、お手洗いから殿下がなかなか出てこないことに気がつく。いくらなんでも長すぎるような。

(まさか……)

——バンツ!!

嫌な予感が出て慌ててお手洗いの扉を開けば、そこはもぬけの殻だった。開いた窓から風が入ってカーテンが揺れている。どうやらこっそりと窓から外に出たようだ。

「なんてこと、『黒』の力を使って外に出たのね」

風の魔法でも使えば殿下には容易たやすなことだ。ほんとに騎士泣かせの主君で勘弁してほしい。
(それよりも……なんだか胸騒ぎがする)

殿下はいままで勝手に部屋の外へ出ることはなかった。優等生らしく、そういった分別ぶんべつはある子供だったのだ。周囲の人々から畏怖いふの対象として見られるのも嫌だったのだろう。それなのに私に黙って外へ出るなんて。

(思い当たることといえば……)

——『瑠寶石?』

殿下のことだ。こつそりと文献を読んで、どのようなものかすぐに把握したのだろう。私に知られないように、誰かに手に入れる方法を聞いた可能性だってある。

(もし、それが『白』の皇族派の者であれば……)

ぞっと血の気が引く。考えすぎかもしれないが、いずれにしても彼を一人にさせるのは危険すぎる。すぐに部屋を飛び出し、廊下ろうかにいた侍女に、兄様に宛てて北の森へ来るようにという伝達を残す。そして窓から外に飛び降りると、厩うまやにいた馬に乗り、皇宮を出た。

帝都の北にある森の入り口に着いて馬から下りると、真つ昼間だというのにこっだけ薄暗い。

「なぜ、ここまで空気が澱たまんでいるの?」

(それにこの身体に感じる重苦しさは……?)

たかだか森の中で、ここまでの力を発するものがあるだろうか。そうだとすると、これは……

「殿下の力……」

ぞくりとして、額から汗が流れ落ちていく。背筋が凍りつきそうになりながらも、聖剣をつかんで足を進める。

(お前の力で浄化してね)

言い伝えによると聖剣には負の力を取り込み、無効化させる力があるらしい。本当かどうか分からないが僅すずかに和やはらいだ気もする。だが、やはり奥へ進むにつれ力が強まっているのか、息苦しさを覚える。そのまま進んでいくと、湖の淵にうずくまる小さな黒い影が見えた。

「殿下っ!!」

「あ……」

(あの模様っ、それに何か様子が……っぐ!)

殿下は私の声に反応して顔を上げた。もともと白い肌だったが、さらに生気を失ったように白くなっている。その白さを強調するように、右手の甲から右頬まで鳶とびのような黒の模様が広がっていた。

周りには黒い装束を身に纏まとった男たちがいて、殿下の身体をつかんでいた。フードを被っているため顔はつきりと見えないが、口の端を上げながら呪文のようなものを唱えている。

「貴様ら! 殿下に何を……っぐ!」

男たちに向かって聖剣を振りかざしたが、殿下の身体から放たれる黒い霧ものせいでいつものように力が入らない。

「ごめんなさ……アメル……僕……」

震える殿下の身体をさらに黒い霧が取り囲んでいった。昼間なのに、空を黒い雲が覆っているせいで夜かと思うほどに暗い。これは力の暴発の予兆に違いない。すぐに抑えなければ、こちら一帯が焼け野原になる。

(街も近い。どうするべきか……)

——キーン!!

いきなり背後から向かってきた刃を、聖剣で受け止めて弾き返した。別の男がまた私に剣を向けてくるが、それを下に避けて腹を蹴り飛ばす。顔を上げると、周りを男たちに取り囲まれていた。

「まさかここまで動けるとは……」

「さすが剣聖の称号を持つだけある。全員でやれ！」

その言葉を合図に、剣が私に降りかかってくる。それらを避けて、反撃を加えて倒していく。

「貴様ら、何者だ。殿下に何をした」

「……つぐ……」

「早く答えろ」

最後の一人の足に剣を突き刺し、地面に叩きつけてから、頭を足で押さえる。冷たく見下ろして剣を抜き、顔の横に向けると、男は震えながら口を開いた。

「知らない……この国の者に皇子の力を引き出すようにと金で頼まれただけだ……」

(やっぱりこいつらは呪術者の類ね……はめられたわ!)

剣の柄で首を叩くと、目の前の男は意識を失ったようだ。

殿下が一人になるときを狙っていたに違いない。奴らが唱えていたのは力を最大限に引き出す呪文だ。コントロールを失わせるために、殿下の力をわざと引き出したのだらう。地面に転がるこいつらは、あとで兄様が尋問してくれるはずだ。それよりも殿下を優先しなければ。

「殿下、落ち着いてください……つぐ!!」

うずくまる殿下に近寄ろうとするが、あまりの力の強さに膝から崩れ落ちてしまう。手から聖剣が落ち、苦しきで嘔吐が漏れた。『黒』の重い力が私の身体を地面に押しつける。息ができず全身から大粒の汗が噴き出してくる。口の中に血の味がして、赤い唾液の雫が地面に落ちていった。

(なるほど、内側からやられているのね。身体が悲鳴を上げるわけだわ)

「アメ……ごめ……」

「ふっ……ああ、とっても強いですね……っ!!」

なんとか力を振り絞って顔を上げると、殿下の背後から黒い影が現れた。彼を狙って剣を振りかざす。力が出ないために聖剣を手取る余裕もない。

「殿下っ! ……ぐうあー!」

こうなったらと、殿下を庇うように抱き寄せた。その瞬間、腹を強く貫かれた感覚がする。

「このっ……」

剣を握る敵の手をつかみ、最後の力で引き寄せて首を肘打ちし、気絶させる。倒れた敵を見下ろしたあと熱を持つ腹部に視線を向けると、真っ赤な血が滲み、突き刺さった剣の刃先から流れ落ち

ていた。震える殿下の身体からはさらに黒い靄が放たれている。

(ああ、これはまずい)

「アメル……僕……」

「……落ち着いて。大丈夫……です。深呼吸をしてください……ほら、私は大丈夫ですから」
なんとか力を振り絞って微笑みかける。腹を突き刺している剣と服に滲んでいる血は、背中のマントで隠した。この角度であれば、殿下からは見えないだろう。私の治療よりも、いまは彼を落着かせることが先だ。

「そうです……力を落ち着かせて。大丈夫、その調子」

殿下の震えが収まっていく。空の淀んだ空気よども晴れて、青空が戻ってきた。

(良かった……なんとか食い止められたか……)

「アメル……ありがとう、僕……アメル!？」

緊張の糸が切れたのか、それとも血を失ったためなのか、くらりと頭が揺れて私は地面に倒れ込む。腹部に触れると、手にじんわりと血が滲んだが、大量に出血しているわけではなさそうだ。

騎士であるがゆえにこのような怪我は何度か経験があった。だが、ここまですぐに重症化するとはなかった。もしや、これは……

(剣に毒を塗り込んであったのね。なんと用意周到な)

これまで人間の生命力ではないと周りに感心されてきたが、しっかりと毒まで塗り込まれていては、私も対抗できないようだ。視界が暗くぼやけていく。

「アメルっ!! しっかりして、どうして……」

「殿下……やればできるでは……ないですかっ……はあ……」

「いやだ……どうして……こんな……」

綺麗な瞳から雫が何粒も溢れて、倒れ込んだ私の頬に落ちていく。身体感覚が鈍くなっていることから、自分の残りが長くはないことを悟る。

(ああ、できることなら、あなたが皇帝となる姿を見たかった)

「僕……つく……『白』の力があれば……僕が『黒』だから」

(違う。それは違う。殿下はそのままでも素晴らしいお方だわ)

「でん……そのま……すば……」

殿下が『黒』だからというのとは違う。それを伝えたいのに言葉を上手く発することができない。

ゆっくりと震える手で頬に触れて、薄くなった黒の模様をなぞった。半年あまりの短い期間しか一緒に過ごせなかったが、色の違いなど関係ない。クレイセント殿下は皇帝になるべき人なのだ——たとえ、その近くに私がいなかったとしても。

「アメル!」

握られた小さな手が熱い。ふわりと赤い光が手を包んでいく。冷たくなっていく私の手を、彼が温めてくれているのだろう。

——『ずっと消えてなくなりたいって思ってた』

美しい赤色の光を眺めながら、殿下がああ青空の下で放った言葉を思い出す。

(だめ。そんなのは、決してだめ。殿下は生きるべき人なのだから)
「生きてください……い……あなたは……生きるべき人です」

「アメルっ！ やだっ、死なないで！」

温かい殿下の涙と手の感覚が消えて、視界が霞かすんで暗くなっていく。

(ああ、叶うのなら、もう一度、殿下の傍でお仕えしたい)

こんなありえもしない願いが叶ったのなら、この上ない幸せだろう。涙で輝く美しい彼の瑠璃色の瞳を見つめながら、意識を手放した――

第二章 生まれ変わり(元騎士) 令嬢は諦めません

「お嬢ちゃん、とても可愛い顔をしているな。俺たちと遊ばないか？」

「そんなフードを被っていたらもつたいないぞ？ 俺らが脱がしてやろうか」

帝都の道端を歩いていると、何人かの男に声をかけられた。いつの間にか、ニヤニヤといやらしく笑う大柄な男たちに囲まれていた。道を歩いていた人たちが見ない振りをして離れていく。

「本当？ 私もとっても暇だったの」

指の関節をこっそりとポキポキ鳴らしてから、男の太い腕にそっと触れた。男は鼻息を荒くして、ほかの男と共に私を路地裏に連れていく。裏道に入った途端、待つてましたと言わんばかりに私に覆いかぶさってきた。

(まったく、礼儀を知らない奴らね)

「まずはご挨拶から、でしょう？ セツかな男は嫌われるわよ」

――バキッ!!

膝を曲げて男の腕を避け、肉づきの良い腹を拳こぶしで軽く殴る。

「ぐはぁっ!？」

「あら、ごめんなさい。力の加減を間違えたわ」

軽く殴ったつもりだったが、男は吹き飛んで背中を壁に打ちつけている。大きな腹を抱えながら嗚咽を漏らして地面にうずくまる様子に、周りの男たちが驚いて私を睨みつけた。

「何しやがんだ！ この女っ!!」

「なめやがって！」

同時に襲いかかってくる男たちを避けながら、急所に肘を打ちつけていく。そして、気を失って倒れる男たちの首をつかみ、壁際に投げつけて積み重ねていった。

(ゴミ箱の隣に置いとけば、誰かが持っていってくれるでしょ)

「な、なんだ……お前は……」

「ん？ まだいたの？ ちょうど体術を習得しているところだったし、まだ練習を続けてもいいわよ」

ふっと笑って手招きすると、最後の一人が震えながら私に飛びかかってくる。つかみかかろうとする手を飛び跳ねて避け、ゴミ箱に足をかけて顔に回し蹴りをお見舞いしてやった。男は気絶し、仲間たちの屍が積み重なる上に倒れ込んだ。

(ふう、こんなものか。たいした練習にもならなかったわね)

地面にびよんと着地して、パンパンと手を叩く。積み重なった男たちを確認してみるのが、めぼしいものはない。

「んー、なんにも証拠らしきものはないか。やっぱり奴らに繋がる手がかりなんて、そうそう見つかからないわよね」

ざっと手持ち品を確認してから、ふっと息を吐いて顔を上げる。頭にかぶったローブを下ろすと、長い空色の髪が肩に流れ落ちた。

(ここも無駄足だったか)

ポケットから小さな瓶を取り出し、中に入っている朱色の紅に小指の先で触れて、ぷっくりとした唇になぞった。何度か唇を擦り合わせてならしたあと、路地裏から出る。

「リゼー!!」

(うわっ！ ギリギリセーフ！)

肩まである空色の髪を揺らしながら、ふわりと柔らかい笑みを浮かべてこちらに走ってくる男性。綺麗な薄黄色のアーモンド形の目をした美青年だ。彼が身に纏っている白地に金縁飾りがついた羽織が揺れると、周りの女性が真っ赤になって持っていた荷物を落とした。

「久しぶりに会えたのに、急にいなくなるなんて！」

「っぐ!!」

飛びかからんばかりの勢いで、ぎゅーっと抱きしめられて息ができない。先ほどの男たちと同じように膝蹴りをかましてやりたいが、ぐっと我慢して手で彼の身体を離れた。

「お、お兄様。ごめんなさい、少し気になるものがあって……」

「気になるもの？」

「ええ。道端に可愛らしい猫ちゃんたちがいて、一緒に遊んでいたの」

「猫？」

「撫でてあげたらとつても可愛い声で鳴いたのよ。ああ、お兄様にも聞かせてあげたかったわ」
自身の頬に手を添えてちらりと見上げると、彼の背後に大量の薔薇が咲いた……気がする。今度は周りの女性たちがこちらを見て目をギョつかせている。怖い。

「リゼは本当に優しい子だね。僕はリゼと一緒にいられるだけで十分だよ」
「ふふ、お兄様ったら」

（まあ、猫の鳴き声じゃなくて、男どもの断末魔だったけどね）

それはもう美しい顔で抱きしめてくる相手に笑いかけながら、そんなことを考える。背後の路地裏の惨劇を見れば、純粹な彼は卒倒するだろう。

目の前で美しく笑うのは、私の現在の兄で、四つ違いのシエルお兄様。私には脳筋のガサツな兄しかいなかったはずだ。けれど彼も真正正銘、血が繋がった兄なのだ。

——そう、私はいま別の人物、リゼ・カデイスとして生きている。

腹部を刺されて死んだあと、すぐに私はロメルシエ帝国のカデイス男爵家に赤ん坊として生まれ変わった。しかも、アメリカの記憶を持ちながら。

（私の忠誠心が神様に伝わったのかしら？）

どんな力が働いたのかは分からないが、死んでからすぐに、帝国民として新たな生を受けたのだ。
「テラス席しかなかったの？ お兄様、少し目立って嫌だわ」

カフェに移動してお兄様とお茶をしているが、テラス席のせいで道端を歩く男性たちから向けられる熱い視線が鬱陶しい。

アメリカとして生きていた頃にも、カデイス男爵家の人たちはみんな美しい容姿をしていると聞いたことがあった。それを受け継いだためか、自分で言うのもなんだが、私もそれはまあ美しい外見をしていた。絹のように艶やかな空色の髪に、薄黄色の丸い目。生まれかわって十八年経つが、いまだに鏡に映る自分の姿に慣れない。

アメリカだった頃は、男性から尊敬に近い熱い視線を送られることはあった。だが、いまはなんとも気持ちの悪いねつとりとした眼差しばかり向けられる。

（まさかモテるのが、ここまで面倒だとは……）

これなら女騎士のほうが楽だったのかもしれない。道端を歩いていけば、いきなり男性から襲われることもたびたび。まあ、そのたびに手慣らしにちょうどいいと、先ほどのように返り討ちにしてやっていたのだが。

「大丈夫。リゼを変な目で見る奴は僕が倒すから！」

「あはは……」

（シエルお兄様の戦闘能力は皆無でしょう）

陰で私が男たちをぼこぼこに倒していたのは、教えないでおこう。自信をなくしそうだからねと苦笑しながら紅茶を口に含む。

シエルお兄様は剣技などの実技に関してはまったくだめだったが、治癒の力を持ち合わせていた。そのため、治癒を専門とする聖職者として、医者のような立場で皇宮に勤めている。なんと、次期大聖職者候補とも言われている。

満足げに笑っているシエルお兄様は、持ってきていた新聞を広げて読み始める。横から覗き込むと、近々行われるという建国千年祭の記事が皇族の姿絵とともに掲載されていた——けれど、そこには見慣れていた主君の姿はなかった。

私はふうと息を吐き、カップをソーサーに置いて顔を上げる。

「シエルお兄様、やっぱりまだクレイセント殿下にお目にかかれたことはないのよね？」

「クレイセント殿下？ ああ。そうだね。もともと殿下は暮らしておられる宮が違うらしいから」

「そう……」

「リゼが気にすることじゃないよ。本当に優しい子だなあ」

お兄様に不審がられないように無理やり笑顔を作る。

（いまだに得られる情報はなし、か）

私が死んだあと、新聞各社は『クレイセント殿下、またもや『黒』の力を暴発させる。護衛騎士である劍聖アメリア・ラルディーニ様死亡』と、さも殿下が貴重な劍聖を殺した罪人かのように報じた。

きつと陛下はこの件を、内密に済ませたかったはずだろう。それなのに、すぐに国民に情報が流れてしまったのは、クレイセント殿下をよく思わない者の仕業しわざに違いない。やはり誰かがクレイセント殿下をはめたのだ。

殿下の『黒』の力を無理やり引き出し、それを理由に彼を暗殺しようとしたが、私に阻はまれたため、やむなく殿下の居場所をさらになくす方向へ変えたということだ。なんと卑劣なことをする

のか。

はめられたことへの怒りに、殿下をお守りしきれなかったことへの悔しさ。赤ん坊として生まれ変わった直後は、様々な感情から泣きじゃくった。幸い、見た目相応だったので家族からは不審がられなかったが。

（自死は選んでないとは思っけど……）

それ以降、クレイセント殿下のご様子が報じられることはなくなった。そのため殿下のいまの情報が多すぎて入ってこないのだ。不安しかない。文献にも『黒』は静かに自死を選び、消えることが多いと書かれていた。

——『アメル』

私の名前を呼んで頬を赤く染め、優しく微笑んでいた殿下の姿が脳裏に浮かぶ。もしそんな彼が自らの首に剣を向けていたら……

「っ……」

想像しただけでも背筋が凍る。固く唇を閉ざしていると、お兄様が不安そうに私の手を握りしめてきた。

「リゼ、帝都で暮らすのは大変でしょう。お父様とお母様も心配してるよ」

「大丈夫よ。何も不便はないわ」

「でもっ、伯爵家の屋敷で用人人なんかして！ それだけでも心配なのよ！」

「お金を稼ぐには必要なことだわ。それにみんな良い人よ」

いまは帝都にある伯爵家の屋敷に勤めている。そこのご主人は色んな国へ旅するのが好きな方だった。それはつまり、たくさん情報を得ることができるということでもある。つまりは、あの呪術の出処を知れる可能性もあるのだ。

実はそれ以外にも夜な夜な帝都を出歩き、情報を集めているのだが、もちろんシエルお兄様には秘密だった。

(私に苦勞させたくないんだろうな)

安心させるためにも彼に微笑んでみせるが、そんな私の思惑なんて知る由もないお兄様は不満げだ。

「それはそうだけど……ほら、手にもたくさん傷がついている。すぐに僕が治してあげる！」

「ありがとう」

シエルお兄様が私の手を握りしめて呪文を唱えると、傷が綺麗に治っていく。

(うーん、いつでも戦えるように、夜遅くにこっそり剣を振っていたせいで、タコができただけなんだけどな)

お兄様にとっては、心配ごとが増えただけのようだ。

生まれ変わって違う人物になって十八年、殿下を再びお守りするどころか、いまだに私をはめた奴らを探し出し制裁を加えることすらできていなかった。いったい何をしていったんだと言われても仕方ない。だが、これには事情があったのだ。

「お兄様のお給金だけでは我が家の負債は返せないわ。私のことは気にしないで」

「……っ」

現実を突きつけると、シエルお兄様が悲しそうに眉を歪ませた。

そう、カデイス男爵家は没落しており、帝国の端の端に屋敷があったのだ。次期大聖職者候補のお兄様の給金はいはずなのだが……お人好しの両親がたびたび他人の負債をかかえてくるので、我が家はいつまで経っても金欠だった。

十歳になる頃、少ないお小遣いを貯めて帝都に向かったことがある。ようやく殿下に会えるとはやる気持ちを抑え、『クレイセント殿下にお伝えしたい』と皇宮の門番に伝えたところ、笑って追い払われて終わった。

ならば、皇族主催の催しに参加しようと思ったものの、没落貧乏貴族のため、参加する権利すら与えられない。もはやカデイス男爵家は平民と同等の立ち位置だったのだ。

(没落した貴族がここまで大変だったとは……)

鳥のさえずりが響く、平和で静かな田舎町。そこにあるポロ屋敷の部屋の中で、私は数え切れないくらい頭を抱えた。再び殿下をお守りするまでの道が果てしなく遠い。由緒正しいラルディーニ侯爵家で育った前世の私が経験したこともない、粗雑な扱われ方に愕然とした。

それに、騎士になろうと思っても、女であるという理由で取り合ってもらえなかった。アメリカが騎士になれたのは、あくまで家の力があつたからこそだったのだ。

『クレイセント殿下に仕えた女騎士も簡単に死んだ』

『剣聖の称号は名ばかり。しよせんは女だった』

騎士団に入団したいと申し出ても、そう見下されて門前払いをくらうばかりだった。あの事件のあと、女性が騎士を目指すことは良しとしないと、騎士団の方針が変わったそう。前の自分がやらなかったことが、女騎士への道をさらに狭き門にしていた。

(女であろうがなかるうが、あの状況で殿下の命を守れたことだけでも褒めてほしいものだわ！) その方針が書かれた記事を読んだとき、怒りのあまり新聞を壁に投げつけ、庭の木々をすべてへし折ってしまった。その様子を目撃し、卒倒しそうになる母様を『幻覚ですわ』と無理やり丸め込むのはなかなか大変だった。

皇族主催の催しにも参加できない、皇宮に入ることすらも許されない。ならば……

——クレイセント殿下直属の用人になるしかない！

こうして私は最後の手段を選ぶこととなった。

そのために、いまは帝都で下積み中なのだ。皇宮に勤める用人は最低でも五年、帝都にある貴族の屋敷で働いた経験がないといけない。私は十三歳になる頃から伯爵家の屋敷に働きに出たので今年で五年になる。やっと皇宮の用人として働くための権利を得られたのだ。

(早く、早く殿下にお仕えしないと。そろそろ皇宮の用人に応募して……)

「あつ、そういえば……」

「え？」

深く考えていると、お兄様が笑顔でびんつと人差し指を立てた。

「皇宮で用人を何人か募集するみたいだよ」

(なんてタイムリー！)

——ガターン!!

いきなり立ち上がった私に、シエルお兄様が目を丸くしている。危ない、危ない。興奮のあまりテーブルと椅子を粉々に破壊するところだった。

それより、やっと思惑通り事が進みそうだ。念願の主君にお近づきになるチャンス。鼻息が荒くなるのを必死に堪えて、倒れた椅子を戻してから座り直した。

「リ、リゼ？ 息荒くない？」

「ふっ、ふふ、な、なんでもないわ。それで使用人の話は……」

「ああ、陛下直々のお申し出らしい。今度、採用試験があるとか」

「陛下直々ですって？」

「うん、何か理由でもあるのかなあって。最近の皇宮内はその話で持ち切りなんだよ。まあ、リゼには関係ないけど、伯爵家の用人の中に、誰か希望者がいれば……」

「私、それに応募するわ」

優雅に笑うと、お兄様がまたまた目を丸くした。

「だめだよ、リゼ！ 皇宮で働くなんてっ！」

「どうして？ 皇宮で働くのは、とっても名誉なことでしょう？」

「だって、皇宮には貴族がたくさん訪れるんだよ!? こんなに可愛いリゼが変な貴族たちに目をつけられたらどうするんだ！」

うるうると瞳を潤ませながら、心配そうに私の手を握ってくる。

「ちっ、相変わらずガードが堅い」

なんというか、あの脳筋兄様とは顔も性格も正反対だ。アメリカのときは『早く誰かに目をつけられて嫁にいけよ』なんて、ゲラゲラと笑われていた覚えがある。思い出すだけで腹が立つてくる。いやいや、そんなことを思い出している場合ではなかった。

「お給金もたくさんもらえるわ。何より、皇宮で働けばお兄様と毎日会えるし。だから働きたいのに……それでも、だめ？」

上目遣いで見つめると、お兄様が口元を緩ませている。それ以上、反論してこない。

ふっ、さすがお人好しなカディス男爵家の生まれだ。シエルお兄様も心配になるほどちよいい。

「お兄様と同じ職場だなんて、想像しただけで私はとっても嬉しい」

「うっ……」

「もちろん推薦してくれるわよね？」

「推薦っ!? そ、それは……」

「推薦、してくれるわよね？」

——ギリギリギリギリ。

（殿下にお近づきになるチャンスなのよ。さっさと頷きなさい！）

笑みを浮かべながらも、瞬きせず目を見開く。そう脳内で圧をかけて、握り返した手に力を込めた。すぐにお兄様が苦痛に眉を歪めて、コクコクと高速で首を縦に振った。

「嬉しい！ お兄様、大好き！」

「はは、大丈夫……握力で死ぬかと思った。なんでだ……リゼはこんなにも可愛いのに……」
ぎゅっとお兄様に抱きついて可愛らしい笑みを浮かべるが、脳内では決意を固めていた。

（殿下、待っていてください！ 遅くなりましたが、必ずやまたお守りいたしますからね!!）
何度目かの正直を脳内で叫んだのだった。

◇ ◇ ◇

それから数ヶ月後。豪華な装飾が施された大きな部屋の中に、帝都の至るところから集まった使用人たちがずらりと並んでいた。

「陛下直々に使用人希望者を集めるなんて、初めてのことよね？ ほかの使用人とは何か違う仕事を与えられるのかしら？」

「とってもお給金がいいのよね。このチャンスは逃せないわ」

ひそひそと話す使用人たち。私も着慣れたメイド服を身に纏い、長い空色の髪を一つにまとめている。

（やっと皇宮に入れたああああ!!）

脳内で両手を上げてガッツポーズをする。十八年ぶりに皇宮に足を踏み入れた。それだけで泣きそうだ。ところどころ改装はされているが造りは変わらない。感慨深すぎて、いまにも嗚咽を漏ら

してしまいそうだ。

「あの子、顔は綺麗なのに様子がおかしいんだけど……」

「なんだが、生き別れた両親と会えたような雰囲気ね」

周りの使用人たちが私から離れていく。ぽつんと孤立してしまったのは、少し恥ずかしい。

（お兄様に感謝しないとね）

シエルお兄様が推薦してくれたおかげもあってか、書類審査と最後の面接試験はなんなくクリアできた。残すはこの最終試験のみ。どのような試験なのだろうかと考えていると、奥の扉が開かれる音がして部屋の中が静まり返った。

「ん？」

（うわあ!? 兄様!）

開かれた扉から入ってきたのはアルフェント兄様だった。いまは五十歳前後のはずだが、変わらずムキムキな身体をしている。歳をとってなおのこと力強さが増した気がする。

アルフェント兄様のことは、パレードなどの際に陛下の傍で護衛する姿を何度か見ていたので、いまさら特段の驚きはない。生まれ変わりの件を話して協力してもらっても良かったのだが、いかせん彼は嘘がつけない不器用な男なのだ。そのせいで周囲に素性を気づかれて動きづらくなるのも困る。まあ、私も似たようなものだが、彼のほうが少し……いや、かなりひどい。

（謝りはしたいけど……）

私が死んだせいで、色々なところから非難を受けたことは間違いない。殿下の力を抑えて死んだ

ことになっているが、大前提として私が彼から目を離れたことは罪に問われてもおかしくない。

その罪をすべて被ったのが父様だ。責任をとって陛下の護衛騎士という立場を辞し、爵位も兄様に引き継いだ。いまは帝都から離れたラルディーニ家の領地にある屋敷で隠居しているという。

（それに父様が辞めたことで、貴族内の力のバランスが崩れたわ）

皇帝陛下には腹違いの弟がいる。皇弟のバズバンド殿下だ。いまは彼が『白』を信仰する貴族たちを束ねていると聞く。護衛騎士として、長らく貴族たちをまとめていた父様が社交界と帝都から離れたことで、ラルディーニ家を筆頭とする皇帝派が、『白』を信仰する貴族たちの皇弟派に勢力を削がれている。

そんな中で、アルフェント兄様は陛下の護衛騎士を務めている。彼の苦勞を想像すれば申し訳なさが襲ってきて、ぐっと唇を噛んだ。

「何……今度はすっごい負のオーラなんだけど」

「あの子、なんの目的で来たんだろう。怖い」

また私の周りから人が離れていく。表情を戻そうとしていると、今度は女性たちから黄色い声が上がった。もちろんそれは……

（現お兄様、ね）

アルフェント兄様のあとから入ってきたのはシエルお兄様だった。ふわりと微笑みながら白地の羽織を揺らす。ここでも変わらない美しさを放ち、周りに花が咲いたようだ。

「やだっ！ シエル様もいらっしやるなら、もっとしっかりお化粧すれば良かったわ！」

「シエル様にお会いできただけでも、最終試験まで残ったかいがあったわね」

「ああ、ラルディーニ卿が邪魔ね。少し離れてくれないかしら」

（あー……シエルお兄様と並べるのは鬼畜の所業でしょう。誰か離してやって）

アルフェント兄様の隣に並ぶと、シエルお兄様の美しさがさらに際立っている。悲しいような嬉しいような。とにかく複雑な感情になるから勘弁してほしい。

（——ん？）

「っ！ なぜこちらにつ……」

突然部屋に入ってきた人物を見て、アルフェント兄様が慌てている。部屋にいた者たちも、一瞬にして静かになり、頭を下げた。何事かと、私もそちらに視線を向けると――

「気にするな。顔ぶれを確認するだけだ」

「は、はあ」

（なぜこのようなところに……）

「皇帝陛下……」

深く頭を下げたまま、小さく呟いた私の声が震えている。視線だけを上に向けると、長い朱色のマントを揺らして歩く月白色の髪をした男性が目に入る。部屋の奥に用意された玉座に辿り着くと、ゆつたりと腰掛けて足を組んだ。クレイセント殿下があれほどの容姿をしているだけあって、皇帝陛下も恐ろしいほど美形だ。いまは四十代というのが信じられない。

（これほどまで近くに……それに同じ部屋の中で……）

久しぶりに皇宮内で陛下にお目にかかれたことで、胸に熱く込み上げてくるものがある。

「顔を上げよ」

陛下の声に、私は反射的に顔を上げて大きく口を開いた。

「はっ！ 帝国の太陽、ご尊顔を拝し、恐悦至極に存じます。我が命をかけて一生お守りいたしませうことを誓います！」

右手は左胸に当て、左手は背中に回し、背筋を伸ばしながら宣言する。

——しーん。

静まり返った部屋の中で、「誓います、誓います……」という私の声だけが反響している。

「……あ」

（しまったあああああ!!）

感動のあまり、皇帝陛下に向かって無意識に騎士の口上を発してしまった。アルフェント兄様もシエルお兄様も、それに周りの使用人たちも目を丸くしている。

「なぜ騎士の……」

「あっ、ああああ!! 僕が教えたのですっ！ あれは僕の妹でして、も、申し訳ありません!!」

（シエルお兄様——!!）

シエルお兄様が何度も頭を下げて必死に謝り倒している。いまだけは頼りになるお兄様に感謝しかない。

「にしては、声の張り方や姿勢の角度もすべてが完璧だったような……?」